場所　〒502-0812　岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

わいわい、がやがや、みんなで哲学

第153号
2021年4月

哲学カフェ de ぎふ
千秋（せんしゅう）まちかど文庫　通信

運営委員会発行(記録：安藤彰浩、編集：中川健史)(主宰：吉田千秋 090-7917-9602　yoshida0@sepia.ocn.ne.jp

第153回例会記録　2021.3.11

《2050年までに温室効果ガスの排出をゼロにすることは可能なのか？》

「日本政府は温暖化・気候変動問題にやっと乗り出したが、その深刻さに対して本気に取り組む姿勢になっていないのではないか。このことが理解されだしたが、それにしても、私たちの側も本気度が問われているように思われる。」

問題提起　吉田千秋（主宰）

＊3か月ぶりの例会となりました。10年前の今日、私たちは東日本大震災と称される未曾有の大災害を経験しました。私は岐阜市内の介護施設のホールで講演をしていました。家へ帰ってテレビを見て驚きました。大津波が押し寄せる恐ろしい光景を忘れることはないでしょう。それは多くの日本人が共有する記憶となっています。後日現地を訪れて、凄まじい破壊の様子を目の当たりにしました。被災地を訪れ思ったことは、避難を余儀なくされた人たちは、ただ移住を余儀なくされただけでない。一人ひとりが根を張る場所“故郷”(ドイツ語で“Heimatハイマート”と呼ばれる）を奪われてしまったということです。災害からの復興はまだ終わっていません。津波による破壊の跡はほとんど取り除かれましたが、まだ避難生活をする人がたくさんおられます。津波で施設の一部が壊れ制御不能となってメルトダウンを起こした福島原発の撤去作業は、溶けた核物質が発する強い放射能のために、終息の見通しの立たない状態が続いています。3.11という言葉で記憶されるあの災害から私たちは何を教訓として得たでしょうか。

＊地球温暖化対策として、日本政府は、遅まきながら昨年末、「2050年までに温室効果ガスの排出を実質的にゼロにするカーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指す」という目標を掲げました。宣言するのは簡単ですが、日本は本当に排出ゼロの目標を達成することができるのでしょうか。これまで省エネの成果が無い訳ではありませんが、その取り組みだけで十分でないことは明らかです。

＊温室効果ガス削減の取り組みは多岐にわたります。日本の産業界で、二酸化炭素の排出を減らす技術的な取り組みが行われています。石炭(コークス)と鉄鉱石を燃やして作る鉄鋼やセメントの生産で二酸化炭素の排出は避けられないと考えられて来ましたが、鉄鋼生産に水素を利用したり、逆に二酸化炭素を使ったセメント生産法が開発されようとしています。問題はイノベーションを待つ時間的な余裕が無いということです。

＊与えられた時間内に温室効果ガス排出ゼロの削減目標を達成するために必要な事は、太陽光発電、地熱発電、海洋発電、海上風力発電(ドイツを参照)の促進をはじめ、再生可能エネルギーの割合を大幅に増やして電源構成を根本から変えることです。ところが、日本ではこれらの施策が抑制され、「安全・安心・安価」神話のもと、改めて原発依存が提唱され、再稼働が進められたりしています。まさに、世界の趨勢と真逆な方向でしかなく、50年目標は明らかに絵空事でしかありません。

＊将来の社会のあり方として、“持続可能な発展による持続可能な社会の建設”、つまりSD(sustainable development、SS(sustainable society)の実現が提唱されています。だが、それは“SDGsな商品”の個人的購入によって実現できるわけではありません。本当の“持続可能な社会”の実現は、地球環境破壊(＝人間生存

条件破壊）をもたらしている「大量生産、大量消費、大量廃棄」社会を変えなければできないと思われます。こうした巨大な課題とも結びつけて、温暖化問題、原発問題について意見交換したいと思います。

意見交流

《「さよなら原発ぎふ実行委員会」代表　伊藤久司さん》

原発事故があってからいろいろ考えた。事故から3ヶ月後、2011年6月に生まれた反原発運動に、私は2013年に加わった。原発で作られた電力は買わないことにしている。太陽光パネルを設置して、電気をまかなっている。足らなくなる時もある。余った電池を蓄える装置がある。それが自分の所にあれば、有効に使って何とかやって行ける。個人の設備投資としては、太陽光パネルも蓄電池も、値段が問題で、耐久性に難点がある。温暖化の問題に関しては、個人レベルで出来ることには制約がある。

＊自宅に備え付ける太陽光発電では、人々に普及を促すために、電力会社が余剰電力を買い取る制度がある。電力会社は買い取りに懸った費用を電気料金に加算する仕組みになっているから、一般の消費者が結局負担していることになる。

＊太陽光パネルの耐用年数が20年とそれ程長くないことが引っかかる。この投資が本当に経済的に報われるものか疑わしい。

＊個人としてできる温暖化対策の取り組みは省エネだと思う。生活の中にかなり無駄がある。無くてもほとんど変わらないことに、電気などエネルギーを消費している。トイレの便座を電熱器で温めることが本当に必要だとは思わない。

＊もし家を建てるなら、省エネを考えた設計にすることで、エネルギー消費は大きく変わって来る。有効に日差しを取り込む様にするとか、壁を厚くするとか、窓を二重にするとか。

＊温室効果ガス削減を廻って悲観的な意見をよく耳にするが、本気でやろうと思えば、かなりのことができると思う。1960年代から70年代の前半にかけて、全国各地で公害問題に悩まされた。高度経済成長のために払った代償は大きなもので、日本列島はさながら公害列島の様相を呈していた。四日市では石油精製工場の排気ガスによる大気汚染によって非常に多数の人が喘息になったり、九州の水俣では、チッソの化学プラントが垂れ流す水銀化合物よって沢山の人が神経を侵され亡くなったり、富山では岐阜県にある神岡鉱山のカドミウムを含んだ排水が神通川を汚染によって多数の人がイタイイタイ病になった。また東京を始め全国の大都市では、車の排気ガスや工場の排ガスによって大気が汚染され、夏の強い日差しで光化学スモッグが発生したりもした。各地で訴訟が起こされ、最終的に国や企業の責任が問われた。ちょうど全国各地で革新市政や県政が誕生した時期で、政府自民党も強い危機感を抱いて、環境保護のために先進的な環境基準を定めた法規制を設けて、本気で改善に取り組んだ。そのために日本は環境対策先進国となった。当時の厳しい環境規制に、多少、あぐらをかいた部分もあるが、今もって日本の都市の空気は、他国に比して、明らかに澄んでいる。ドイツなどヨーロッパはディーゼル車が多いせいで、都市部の空気は匂いが悪く、自動車の市街地への乗り入れを規制しなければならない状況にある。温室効果ガスの問題は別問題であるが、楽観的見方が出来ない訳ではない。取り組み次第ではないか。

＊福島の原発事故の後、原発は危険だという意識が一気に強まって、一時期、原発反対の意見が圧倒的多数を占めた。時間が経ち、規制も強化され、安全神話が復活しようとしていて、反原発の動きは鈍くなった。対照的に福島の事故後に脱原発を決めたドイツは着実に原発の全廃に向かっている。

＊多くの人が無駄な仕事で生計を立て生活している。人類の生存に欠かせない無駄な仕事は概して高収入を期待できる仕事である。多くの人が高収入の仕事をして快適な生活をしたいと思っている。人々はその場合、快適な生活が環境負荷の大きいエネルギー消費の多いものであることを考えない。

＊自然のある生活にこだわりたい。人間は自然から離れ、自然を壊す生活をしている。捨てられたレジ袋などから生じるマイクロプラスチックが、海に生息する生物の数を上回るほど海を汚染している問題に心が痛む。この問題の元凶は私たち一般市民である。

＊温暖化問題を始め環境問題を資本主義固有の問題と見なしたりする様に、世界観やイデオロギーの問題と捉えることには賛成できない。不毛な議論になるだけ。

個々の問題を辛抱強く一つ一つ解決して行く努力の積み重ねが大切である。

＊コロナ禍が、私たちが普通に消費することがいかに重要かを改めて明らかにした。自粛生活が経済を著しく圧迫している。大量消費、大量生産を批判するのは簡単である。消費文化を批判する人たちが、他方で当たり前の様に、車に乗ったり、新しいスマホに買い替えたりしている。この人たちの消費を批判する積りは無いが、この人たちが消費の害を口にするのを聞くと、一体何を言ってるんだ、って言いたくなる。

＊スマホを持たないと対等な相手と見なされないといった形で、社会生活において、差別され、不利益を蒙る恐れがある。

＊消費そのものが問題である訳ではない。儲けのために大量に生産して大量に消費すること、消費のための消費が問題である。資本主義は人々を必要のためでなく、ただ大きな利益を上げるために生産して、廃棄物の山を作りだす、欲望の過剰に向かわせる。

＊日本人は概ね賢く生きて来た。今回のコロナ問題でも、被害が限定的であるのは、政府の対応の結果ではなく、国民の判断が賢明であるためである。問題はこれまで政府が本気で取り組んでこなかった事。温暖化問題も政府がしなければならないことをすれば、国民は削減目標を達成する努力を惜しまないだろう。

＊福島県民をはじめ東北三県の人たちは、今なお、原発再稼働に対する反対が明らかに多数を占める。世論調査の結果ははっきりしている。問題は被災者が声を上げて行政に働きかけるルート、仕組みが弱いことである。政府は声を挙げさせたくない。下からの声が社会全体の世論形成に反映される仕組みが必要である。

＊コロナ禍でレストランなどは通常の営業ができずに、苦肉の策としてテイクアウト（持ち帰り商品）をやって食いつないでいる。ラーメンをテイクアウトで買うと、プラスチックの入れ物や包みでゴミが一杯になる。省資源には反するが、頑張っている人たちを応援したくなる。レストランの様に客を相手にするサービス営業は経営が大変だと思う。

＊ガスリン車は10年くらいの内に乗れなくなる。自動車生産は二酸化炭素を出さない電気自動車にシフトする。充電のスタンドを至る所に作る必要がある。本当にできるのかと疑がっているが、変化が恐ろしくもある。

＊温暖化問題は人類の未来がかかったグローバルな地球環境の問題である。個人の日常の想像力を越えている。だから多くの人は、言葉で理解していても、切羽詰まった身近な問題と捉えることができない。世界全体の平和も重要である。戦争による破壊は環境に対する最大の脅威かもしれない。

＊ブラジルのアマゾンで熱帯雨林が開発の犠牲になっている。コロナ禍が熱帯雨林に住む原住民にまで及んでいるのは、熱帯雨林の破壊の証でもある。

＊コンビニの包みやプラスチック容器は便利である。環境問題を考えると歓迎できないが、最近、石油ではなく、昆布の様な自然素材を使って、プラスチックを作る技術開発が行われるらしい。水素を活用して、製鉄を行ったり、自動車や飛行機の新しい燃料を作ったりする計画もあると聞いている。車は欠かせないから、新しい技術に期待したい。

＊ミャンマーでは軍によるクーデターが起きた。国民の大多数は軍政への後戻りを拒否していて、軍の弾圧にもかかわらず激しい抵抗を試みている。民主主義を守ろうとする民衆の本気度を感じる。温暖化問題も国民の本気度が問われている。

＊放射能の脅威を軽視してはいけない。目に見えないし、直接感じることはできないから、怖い。その影響が表に表れた時は、体は取り返しのつかない深刻なダメージを受けている可能性が高い。

意見交流の最後に　吉田千秋

＊緊急事態宣言は解除されましたが、政府としては決め手がなく、終息のめどがたたない状況が続いています。どうしても外出も控えようとなりがちですが、今日は参加も思いの外あり、喜ばしい限りです。さて、日本政府による2030年の電源構成の見通しはあ然とする内容で、液化天然ガス、石炭、石油等、いわゆる化石燃料の割合が、相変わらず53%となっていて、太陽光、風力、水力、地熱といった再生可能な自然エネルギーの占める割合は僅か22%～24%に留まっています。

＊しかも原子力は二酸化炭素を排出しないからと高評

価され、なお20%～22%となっています。温室効果ガスの削減の取り組みはこの様な消極的なレベルであってよいのでしょうか。自民党や経済界には原子力や火力を維持しようとする抵抗勢力が大勢いるようです。一般の人々の思いと大きなズレがあると思います。国民の潜在的な反発力に期待したいと思います。

＊政治家や官僚の不祥事が絶えず、長期政権の弊害、疲弊は際立っています。大きな重要問題が山積みですが、政府は問題の根本に迫るしっかりした議論をしようとしません。子どもの未来に何を残していけるのか心配です。政治家に危機感が欠けています。政治家任せにしないで私たち国民も考えなければなりません。しっかり考えて、本気になってやるべきことをやる。そのために必要な事を皆で議論する。常に、他人の意見に耳を貸す必要があります。頑張り過ぎると疲れます。疲れたら、一寸休んでも好いと思います。回復したらまた始めれば好いのです。いのちとくらしを守り、明るい明日に向けて力を合わせましょう。

みなさんの感想、便り、意見など

○「通信」、ありがとうございました。伊藤さんや歩夢君も投稿していたのですね。挿し絵もたくさん使っていただき、お役にたてたことを、嬉しく思っております。
3月例会も面白そうですね。今、斎藤幸平の『人新世の「資本論」』をよんでいます。温暖化問題は、2050問題ではなく、2030問題、いや今日的問題です。イノベーションではなく、社会のあり方を変える必要がある、もっとコモンをあつくしよう、と訴えます。秒読みですね。身体を大切にして、頑張ります。　（長）

○＜「通信」千秋さんの精神的原風景を読んで‥＞
　私は金華山（岐阜城）を眺めながら長良川の堤防を走るコースが大好きです。久しぶりにいつものコースを走ると堤防の木々が切られ整備されていました。風景ががらりと変わってしまいました。鳥たちはどこに行ったのだろう。目に映る社会の変化は速く、人々の心がついていかないように感じます。
　この地球で生きるためには何が一番大事な事だろうか？　その共通理解が出来ていないことが問題ではないかと思いました。
　やはり、対話することが大切であると、私は哲学カフェに集っています。　（子猫）

○久しぶりに再会して話ができてよかった。「地球温暖化の防止」は、今や全地球市民の喫緊の課題である。菅政権政府は2050 年までに、「温室効果ガス、排出ゼロ」を宣言しているが、本当に取り組もうとしているのか疑わしい。むしろ、CO2 を出さないエネルギー源ということで原発維持を正当化しようとしているように見える。福島の原発以後、災害頻発国の日本では、もはや原発の安全神話は崩壊しており、安価なエネルギー神話も吹き飛んでしまっている。にもかかわらず、原発廃止の方向に転換できていないのは、愚の骨頂である。政府としては原発に依存しない持続的な再生エネルギーの開発と拡充に注力すべきであると思う。我々国民も、人と地球環境にやさしい「新政府」を樹立できるような民意を形成したいものである。　（MS）

○今回の例会のテーマは自分にとっては気乗りしないものでした。エコな生活をして、人類の生存の持続可能性を高めるという大義は理解できますが、現実には人類は大量のエネルギーを消費することによって寿命を伸ばし、それを維持するために無意味などうでもいい仕事、産業を作って地球環境に負荷をかけまくってきたという長い歴史があります。あくまで自分個人の感想ですが、今月のテーマに関しては「いまさら遅いわ」というシニカルでアナーキーな感覚、あるいは「わかっちゃいるけどやめられない」という人類の普遍的な命題に囚われてしまいます。しかし頭の片隅には、今後この思考を変化させることができる出来事、思想、解釈がないか探っていきたいという思いはありますので、何らかの解答が自分の生きているうちに出せればいいなと思っています。　（たなか）

○3月のカフェは共感できるものがなかった。
このままの経済活動であり続けるなら、2050年には世界の平均気温が産業革命前よりも4℃あがる、そのとき地球上にどれだけの生き物（ヒトをふくめて）が、生存できるだろうか。そういう課題に人類は直面しており、その原因をつくったのもヒト。すでに多くの生き物、菌類・地衣類・昆虫・鳥・動物が絶滅してきている（文化人類学の上橋氏は「先住生き物」という）いや、ヒトだってフランスやインドでは何千人という方々が、日本においても気温の上昇を身体がコントロールできなくなりなくなっている。
　気温の上昇をおさえようという国際的な取り決めがパリ協定だ。2050年の気温上昇を1,5℃以下に、2030年の目標などを決め、各国が削減目標を掲げたが、集計すると目標達成にはいかない。日本は残念なことに26％の削減目標、岐阜市も国にならって同じ‥‥という現状を前にして、われらはどうこの課題に向きあっている

か。もちろん、国や企業に働きかけることもいる。けれどもこの課題は、国や企業だけのレベルではない。
　日本に住む多くの人々は地球上の富を享受することができる。スイッチ一つで快適な暮らしができ、マーケットに行けばあらゆる国の食べ物が買える。その快適さの裏で泣いている人や生き物はいないだろうか。いつしか我らの暮らしが、地球の生き物を痛めつける加害者になっていないだろうか。そういった目で自らの暮らしをみつめることも大きな課題だ。そのことについて、カフェでは意見が少なかった。後味が悪く、なぜだろうかと思った。そして気づいた。男性は暮らしを語ることはできないのだ。自らの暮らしの主人公になっていない。暮らしは女が回すものという性別役割分業のもとで生きているのだと思った。環境問題はジェンダー構造を現わしていた。　（尚）

○＜“今の心境”を断片的に＞
　ぶれない人の生き方を立派だというが、＊迷い子のような高齢者我何を残すか冥途の土産に＊生きる意味あるやなしやと問うことに意味はあるのか。生きるしかない
　それにしても自殺者が増えたと聞くと、死ぬしかなかったのかと胸が痛む。まして子どもたち。やはり死なずに生きてほしい。我に出来ることはありやなしや。その人の立場になってみないと分からない事が多い。人の意見を否定しないようにしたい。
アナログからデジタル社会への移行が加速する。マイナンバーカードの取得を自治体もうながしてくる。国は次年度にデジタル庁設置を言い出している。生身の人間を数値化して、果たしてどうしようというのか。人と人を繋ぐ媒体が対面や紙ではなくデジタルとは、一体なんなのだろう。イメージできない。5歳の孫ですらスマホゲームに興じ、高齢者の私にもやれという。小学低学年の作文を読み思う。心の内を言語化する意味を！これは、アナログ。　（ひらつか）

○気候変動問題については、現時点では技術開発の進捗を見守るしかない。近年の自然災害は、専門家が指摘するように、温暖化が起因していることはほぼ疑いのない。ようやく菅総理がこの問題に取組むと宣言したことは遅きに逸するとは言え、一歩踏み出したもので良いニュースと言える。
しかし、本番はこれからで、再生エネルギーのさらなる普及や効率化の向上、化石燃料に変えての水素やアンモニア燃料のコスト低減、さらには排出する温室効果ガスの主原因でもある二酸化炭素の地中埋込や、コンクリート成分への利用や一酸化炭素へ変換することによる原料への活用など、様々な技術開発が期待される。今こそ日本の技術力が試される時。
翻って私たちがこの問題に如何に向き合うかは、極力省エネの電化製品に切り替えることで、消費電力を削減するしかない。今の文明の利便性を享受する中で生活の水準を下げることは出来ないし、電気を控えるひと昔の時代へ回帰する発想は、人類の進歩に否定的で好ましくない。そのためには一定の省エネ対策基準を満たさない家電などの電化製品の販売、再販売を制限する政策はあっても良いのではないか。　（ryosa）

○＜福島原発事故10年を迎えて＞
　今年も3月11日はハートフルスクエアGでの「東日本大震災後の今」の展示を観て、厳かな気持ちで黙とうしました。今なお福島県をはじめ3万6000人が避難先での暮らしが続いているのは惨いです。
　エコノミスト小菅伸彦氏は、「これまで原発の問題にあまりかかわらなかった者が、3.11後、急に原発を論じることを揶揄する人がいる。突然、原発に強い関心を向け始めた者の一人だが、あれほどの事故を見てなお、原発は自分にかかわりないことと割り切ることができる人の方が私にはよほど不思議だ。」と述べておられるが、その通りだと思う。
　私もその一人として、10年は節目ではあるが、復興の一通過点であり、我々は「原発とどう向き合ってゆくか」「市民として何ができるか」を問い続けて行きたいと思う。まずは事故後に設けられた40年での廃炉原則を超えた原発が続々と動こうとしている「老朽原発」。そして岐阜県から近い福井県高浜原発1,2号機と美浜3号機は、地元町長が再稼働を認め、知事の同意を残すのみで40年超えて運転する原発が出現しそうである。今、我々は何をなすべきか？
　“省エネルギー・節電”に日本経済再生の道がある。
（井口）

＜「通信」前号（No.152）を読んで＞　⇒今回から、この欄を設けます。

○「わいわいがやがや　みんなでテツガク」というキャッチフレーズがそのまま紙面に溢れています。巻頭の千秋先生のエッセーは、ご自身の生き様を述べつつ、今ある「現実という書物」への鋭い視点、「そうなんだよね」と毎回うなづくことばかりです。
　「さよなら原発」の伊藤さんの文章に、小室等さんの”まちと飛行船”が出てきてびっくり。その昔、中津川で開かれたフォークジャンボリーで、彼は”原子爆弾の歌”を唱った‥「小室等ともあろうものが許せない」と憤慨した思い出も。（もちろん数少ない本物の

フォークシンガーとして敬愛しているし、最新作のアルバム「自由」は傑作です。）

この1月に亡くなった横井久美子さんは、忌野清志郎の歌をカバーしながら「原発無くすまで生き抜こう」と歌い続け、笠木透さんの遺作も、原発を告発する”水を汚すな”だった。廃炉の道は遠いけれど、声を上げ続けなければという思いもあらたにしました。

今月号から始まった「伊自良だより」、ずーと気になっている場所なので、とても楽しみです。カモノハシタニさんの、旅のお話も興味深く読んでいます。モナリザのお話の最後の言葉にウーンと唸らされました。（とても濃密な7わいわいがやがや’、500字では書ききれません。）　（アダ）

○今回は3月号で、かつ東日本大震災後10年という節目の年でもあり、震災色の強い内容でした。

昨年3月コロナ禍にも拘らず、海外旅行に行けないため、その代替地として訪ねた宮城県の東松島市震災復興伝承館は想像どおりのものでしたが、その被害に遭われた方々に想いを寄せてみても、とても遠く及ばないものでしかないと感じました。あらためて被災地の方々が、少しでも明るい未来が感じられるようになってもらえればと願います。

こうした大震災という自然災害はともかく、フクシマにおける原発事故は、東京電力の社員の方々には気の毒ではありますが、地震を引き金としても、充分な備えを怠っていたもので、人災であるとの指摘もやむを得ないと言わざるを得ません。日本政府は代替エネルギー電源を確保し、早く原発廃止への意思決定を行うべきだと考えます。新聞によれば、安全対策費に延べ5.5兆円もの莫大な費用をかけており、その資金を再生エネルギーや蓄電池開発などの新たなエネルギー資源のために支出することが仮にできていたなら、もっと良い安心な現在を送ることができていたのではないかと思えてなりません。　（ryosa）

この一本・映画情報　西川美和監督　「すばらしき世界」2021年

この映画は、実在の人物をモデルにしたノンフィクション作家佐木隆三の小説『身分帳』を原案にしたものである。

26年間の服役を終えた殺人犯三上（別所広司）は「今度こそ堅気ぞ」と身元引受人となってくれた弁護士夫妻（橋爪功、梶芽衣子）の元に向かうバスのなかで誓う。出生不明、育った児童養護施設を飛び出した彼を受け入れてくれたのはヤクザの世界。堅気の世界で生きようとする彼を「社会に出たとたん赤ちゃんなみ」と投げやりにさせる更生の道への険しさ。生活保護の申請をするなかでケースワーカーとのやり取りは生活保護制度の問題点を浮き彫りにする。

前科者の社会復帰をテレビ番組にしようとして、三上の「身分帳」を手にしたテレビディレクター津乃田は、彼を密着取材するうち、路上で男たちに絡まれている女性の仲裁に入り、彼は限りなく狂暴になっていく。三上に恐怖を覚えて取材を辞めようとするが、プロデューサーはけしかける。スーパーで買い物をした三上に万引きの疑いをかけた店長は、誤認であったことを平謝りし、彼の就職の助言をすることになる。受刑中に失効となってしまった運転免許証を取ることも容易ではない。運転免許証が無いことがどんなに不都合なことか。犯した罪は償っても、前科を持つ人が生きなおすことがどんなに困難なことか、それは「社会のレールから外された人が今ほど生きづらい世の中はない」ことを、放送の意図として語るプロデューサーの言葉が胸に刺さる。

受刑中に身に着けた技術も役に立たず、受け入れてくれた介護施設で清掃、ベッドメイキング、園芸など雑用。そこで介護士同士にあった隠れたいじめを目撃して激高する三上の脳裏に、「時には他人事として関わらないことですよ」と諭された言葉が浮かぶ。急な風雨にプランターを運ぶ介護士を手伝い、アパートの干し物を取り入れる窓のカーテンが風で揺れ、ランニングシャツが残されたまま部屋に倒れている三上の手には、介護士から貰った花が握られている。殺人犯の三上を密着取材するうちに、彼の真っすぐで、人なつっこく人間味あふれる面に惹かれていく津乃田が、三上の死に号泣する。

4月3日からシネックスで上映される。もう一度見たい映画だ。　（いわたたかこ）

＜伊自良だより（下）＞　「伊自良の盛衰・・明日への希望 」＞

（前号から続く）

また、（伊自良村は）「非核平和都市宣言のまち」でもあった。

具体的には、お年寄りと子どもが大事にされているのがよく感じられた。公民館の文化活動も盛んで、陶芸、織物、染色、英会話、合唱、俳句、水墨画、料理、パン作り等々、老人のサークルから子どものサークルまで、いろいろあった。小さい村で「井の中の蛙」であってはいけないと、姉妹都市シアトルとの中学生交換留学生制

度を作ったり、修学旅行に村出身の人がやっている北海道の牧場研修を入れたり…。図書館利用も、3400人ほどの村で、一人当たりの貸出点数県内トップ、全国2位を誇っていた。

勿論、村の人たちもみな親切で、「よ～来た」と迎え入れて下さり、畑や田圃を貸して下さったり、サークルに誘って下さったりした。伊自良の自然、から、文化から、村の皆さんから、私は実に多くのことを学ばせてもらってきた。文字通り「村民憲章」が活きている村だと思った。伊自良には”自治がある”とも感じてきた。

そこへ、平成の大合併。平成15年（2003年）4月1日、高富町・美山町と合併した山県市が発足し、伊自良村はこの世から消滅した。住所からも伊自良”の名が消えた。伊自良村の文化の里づくり構想の中で計画された花咲ホールや古田紹欽記念館は、この年11月にオープンしたが、山県市の施設になった。”文化の里”のはずだった伊自良地区は、農業も林業も廃れ、太陽光パネルが住宅地にも広がって、山県市の僻地になった‥。

ここに、伊自良村の民族と自然をまとめた箱入りの「郷土誌」がある。『21世紀への贈りもの』だ。平成14年（2002年）に伊自良村教育委員会の努力で発刊され、村の全戸に配布された。

伊自良の連柿風景（ネットより）

21世紀もすでに20年が過ぎた。2030年までに、あと10年のうちに、人類の進む道を正しく選択していかないと、地球も人間も破滅の方向へいってしまう‥と、多くの警告が出されている今。コロナ下で、それが一層顕著になっているのでは？　一極集中の大都市化の弊害。そこにある様々な格差…。

ビルの建ち並ぶ”都市”はもういらない。小さくても、人の顔が見える、人とのつながりが大事にできる、自分たちの住む地域のことを自分たち自身で考えることのできる”街（住処）”が必要なのではないか。そういう小さい自治体の自治を保障していくのが、国の勤めではないか。

終の住処で、ウイズコロナ、ポストコロナの生活を、もう一度伊自良の歴史の中から学び、考えていきたい‥と、思っている私である。　（あ）

＜世界一周貧乏旅　その20＞「グアテマラとセマナサンタ」

もし、世界一周旅行へこれから行こうとする方がいるのであれば、「グアテマラでタニシを食べすぎるな」と言いたい。たとえiPadを盗まれて自暴自棄になっていたとしても、近くの濁った湖で獲れたタニシのバターソテーなんてものは決して、しかも大量になんて絶対に食べてはいけません。そんな人は恐らく、1日のほとんどをトイレで生活することになるでしょう。僕が保証します。

さて、ちょうど6年前の4月上旬、僕はグアテマラにいました。

その名前からは恐らくほとんどの人がコーヒーを連想するかと思われます。実際にグアテマラの海外輸出は農業が3分の2を占め、主要産品はコーヒー、砂糖、バナナで、日本はコーヒーに関しては年間3万トン前後をグアテマラから輸入しています。

中米に位置するグアテマラは、北海道と四国を合わせた広さよりやや大きいくらいの、人口1660万人ほどの国であります。公用語はスペイン語で国民の6割程度が使用しています。アメリカの隣の隣にある国とはいえ、僕が旅した当時は、英語でコミュニケーションを頑張るよりも、片言のスペイン語の方が上手に意思疎通できた印象があります。

この国の宗教は、国民の3人に2人がローマ・カトリック教徒でもっとも多く、今回載せた写真はグアテマラのサンペドロ・ラ・ラグーナと言う場所で見た『セマナサンタ』という宗教行事の時のものです。復活祭の一週間前に行われるこのお祭りの見所は、『アルフォンブラ』という、いわば神様へのお供え物のようなもので、色をつけたおがくずやお花、果物、野菜などで作られたアルフォンブラ（絨毯）の上を、大勢に担がれたキリスト像の山車が通っていくというものです。

この山車というのは『プロセシオン』という、日本でいえばお祭りのお神輿に近いもので、巨大なキリスト像を同じ衣装に身を包んだ人々が担ぎ、教会を出発し、町を練り歩き、そしてまた教会に戻るというものです。この美しくカラフルな絨毯は町の通りに沿って延々と描かれており、場所によって様々な模様が観ることができます。だが、プロセシオンが通った後はぐちゃぐちゃ。飾り付けに使われた果物に関してはプロセシオンが通り終わるや否や、子供達がすごい勢いでかっさらっていくのでした。

今年2021年のイースターは3月28日から4月4日までで、ちょっと今年は行けなさそうですが、いつかまたあの美しい絨毯を観に行けたらなと思います。

（カモノハシタニ）

2021年前半　哲学カフェ、第25期の予定

例会は19:00～21:00です。
会場は、ふれあいスペースです。

第151回例会 1月14日（木）	**「世の中を明るくするには何が必要か？」** ＊新型コロナ蔓延が「永続波」となり、ワクチンのみが明るい材料。だがどうか。 ＊コロナ危機で新たな変革の兆しが見えてきたが、これをどう実現するのか。 中止しました
第152回例会 2月11日（木）	**「攻撃優先を進める＜理論＞と＜予算＞を問い直す？」** ＊コロナ対策のために膨大にふくれあがった予算は、一体どのように使われたのか。 ＊その影に隠れて推進される自衛隊の攻撃軍隊化。その危険な理論とムダ予算に注 中止しました
第153回例会 3月11日(木)	**「2050年までに温室効果ガスゼロは可能なのか？」** ＊世界の趨勢にまったく反する政策をとってきた日本政府は、突然、ゼロ目標発表 ＊これはCO2ゼロではなく、原発も含めているまやかしもの。これでいいのか。 終了しました
第154回例会 4月8日(木)	**「教育で大切なことは・・コロナ危機を通して？」** ＊コロナ危機の中で、教育のあり方、内容、制度は変えざるを得ないことが生じた。 ＊少人数教育へ一歩踏み出したが、リモート教育の推進、管理主義、高い教育費は？
第155回例会 5月13日(木)	**「女性観、男性観、そして人間観を問い直す」** ＊東京五輪開催にからんで、やっと問題化してきた日本における女性差別の深刻さ。 ＊問題の根っこは、女性＜男性の差別感覚の次元から、人間観の貧しさに目を向けることではないか
第156回例会 6月10日(木)	**「SNS、スマホ、マイナンバー制の功罪を考える」** ＊SNS、スマホなどの情報取得・伝達・交流手段は、個々人にも大きな効果・利益をもたらす。 ＊だがその手段を持たない者への差別して現れ、その情報が企業・国家によって一元管理されると、国民総監視化に・・。
第157回例会 7月8日(木)	**創立13周年記念行事は休止。通常例会にします。** **「資本主義って何だ、社会主義はどうなった？ この先めざす社会は？」** ＊ソビエト連邦の瓦解によって、資本主義は「勝利」した後、地球規模でますます強欲になり、破壊的になった。 ＊残存した社会主義の多くは変質した。さて、今後めざすべき社会はどのようなものか？

わいわいがやがや　アラカルト

★岐阜は木の国、山の国。他府県で46年間働いた後、この「美濃の国」を終の棲家として、8年が経過。田舎暮らしは気に入っている。前号の通信で、「あ」さんの「田舎暮らし礼賛」の記事を読ませていただき、大いに共感を覚えた次第。

★岐阜県には海がないので残念だが、その代わり、どこに行っても身近に山並と里山の風景が見られることは素晴らしい。田舎は多くの人の心のふるさとではないかと思う。「ふるさとは遠きにありて思うもの　そして悲しくうたうもの・・」と歌ったのは、室生犀星だったか。

★里山の良い所は、自然の恵みが豊かであるということだ。清流の国、岐阜県には、斎藤幸平さん（『人新世の資本論』著者）のいう、自然の「コモンズ」があふれているような気がする。里山の良さを一番強く感じるのは春と秋。先ず、初春の頃、白梅と紅梅が咲き、シデコブシ、サンシュユ、紅や白の椿、黄金色のレンギョーや水仙、ユキヤナギ、それに山桜などが一斉に咲き乱れて農村の風景を飾る。

★近くにはイチゴの自動販売機があり、しばしば愛用している。また近くの畑やお寺の境内で蕗の薹や土筆を摘み取れる。4月初旬に山間部に入ったら、山菜の王様と言われるタラの芽やコシアブラが採集できる。毎年、これらを天婦羅にして賞味している。

★秋は何といっても柿の収穫。山間では栗拾いとアケビ狩り。田舎暮らしには問題点もあるが、敢えて「里山賛歌」の一文を書いた理由は、若い人たちに、退役後は是非とも田舎暮らしを楽しんでもらいたいと思っているからである。ただし、隣の県の原発だけは要注意。　（島田幹夫）